

映像文化と親密圏に関する比較社会学的研究

— 旧ソ・東欧圏と東アジアにおけるモダニティを対象として —

Visual Culture and Intimacy: Comparative Study on Eastern Europe and East Asia

周東 夏希（京都大学大学院文学研究科 博士後期課程）

【メンバー】

菅原 祥（京都大学大学院文学研究科 博士後期課程）

【ねらいと目的】

本研究は、近代という時代と深く関わりを持った映画という視覚メディアに着目し、そこで20世紀のモダニティにおける親密圏がどのように表象され、また逆にそれが現実の親密圏・公共圏の再編成にどのような影響を及ぼしてきたのかを検討することを目標とする。本研究はとりわけ、社会主義体制下のポーランドおよび植民地朝鮮という二つのフィールドに焦点を当てる。これら二つの地域に着目する理由は、それらがいずれも、西欧近代とは微妙に異なる近代化のプロセスを辿ってきたからにほかならない。そこにおいては、単に政治・経済面のみならず、人々の親密な生活やそれにまつわる想像力・欲望の領域に至るまで、社会主義のユートピア的プロジェクトの想像力（ポーランド）、あるいは、帝国日本による国策的・啓蒙主義的な支配（朝鮮）が決定的な影響を及ぼし、親密圏と公共圏を特異な形で編成してきたのである。本研究は、映画メディアにおけるこうした近代化とそれに関わる親密圏と公共圏の再編成を分析することを目指した。具体的には、7月～9月に研究分担者2名がそれぞれ韓国及び旧東欧地域における映画関係の資料・アーカイヴを精査することで、これらの地域における映画表象とその受容のあり方を歴史社会学的に解明しようとした。

【活動の記録】

8月28日～9月29日

ポーランド・ワルシャワ市 ワルシャワ大学図書館・国立映画アーカイブにて資料収集調査（菅原祥）

9月15日～9月29日

韓国・ソウル市 ソウル大学図書館・韓国映像資料院にて資料収集調査（周東夏希）

10月17日

共同研究者2名による調査成果の報告会、および最終成果報告に向けた話し合い

2月16日

GCOE 成果報告会における発表

【成果の概要】

研究メンバーは個々に 1930 年代の朝鮮映画および 1950 年代 のポーランド映画についての資料収集・分析を行った。その結果以下のような成果を得ることができた。まず 1930 年代の朝鮮において興味深い現象として見いだされたのは、帝国日本の文化政策のもと、現地の映画監督や評論家たち自身もまた、映画の高級芸術化をめざしていたという事実である。そこでは彼らによって、観客たちの「低級」な趣味が問題点として指摘され、教化の対象となった。他方、観客たちの側はしばしば、こうした教化の前提にある古典映画のパラダイムを身につけておらず、それとは別の想像力のあり方によって当時の映画を鑑賞していた。帝国日本が啓蒙的国策映画によって現出しようとしたのは、参加民主主義を理想とする「ファシスト的公共圏」だったかもしれないが、観客たちはそれにとらわれない公共圏を形成しようとしていたと言えるのである。

他方、1950 年代前半の社会主義建設最中のポーランドにおいては、社会主義の未来を称えるような社会主義リアリズム映画が多く作られたが、中でも当時のポーランドで大きな大衆的人気を博したのはコメディ映画であった。これらコメディ映画は、その紋切り型のストーリーやイデオロギー的・教訓的な内容から、現在では価値の低いものと見られることも多いが、これらの映画が大衆の大きな人気を博したという事実は、当時の観客がこれらの映画を、体制側の意図とは別のまなごしによって鑑賞し、楽しんでいた可能性を示唆するものである。

このように、本研究で明らかになったのは、近代化のプロジェクトの中で「上から」もたらされるさまざまな教化や統制が、大衆側の対抗的想像力によってその本来の意図から逸脱し、それとは別の形のプロジェクトを創出していくような可能性である。その意味で本研究の成果は、これら 20 世紀という時代における多様な「近代」のありかたの可能性を示唆するものであろう。



